

---

# 魔法少女リリカルなのは～始まりの物語～

鴉坂カス八

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜始まりの物語〜

### 【Nコード】

N6383M

### 【作者名】

鴉坂カス八

### 【あらすじ】

『魔法少女リリカルなのは〜FIRST STORY〜』のファイル・フェイト視点です。酷い文章だと思いますが、温かい目で見守っていたけると嬉しいです。また、感想やアドバイスなどがありましたらよろしく願います。

## オリキャラ&デバイス設定

名前：フィレス・テストロッサ

年齢：9歳

魔力量：S+

魔力光：紫

使用術式：ミッドチルダ式

レアスキル：魔力変換資質「炎」

所有デバイス：ヴァリアブルデバイス「ルシファリウス」

備考：フェイトの兄。フェイトと同じく金髪で、髪型はショートヘア。魔法資質を発見した当初は、魔法を発動させる事ができず、魔力爆発を引き起こして失敗ばかりしていたがデバイスを受け取ったからは、魔法を発動できるようになった。優しく、明るい性格をしているが、厳しいときは厳しい。

デバイス設定

名前：ルシファリウス

待機状態：指輪

所有者：ファイルス・テストロッサ

デバイスの種類：ヴァリアブルデバイス

備考：ヴァリアブルデバイスとは、ロストログアを中核にしているデバイスのこと。そのロストログアの効果を使用できることから、時空管理局が定めた法律により、使用・所持が禁止されているデバイスである。効果は不明。ファイルスの誕生日にリニスから受け取った。ファイルスの事をマスターと呼び、フェイトの事をフェイト嬢と呼んでいる。

## プロローグ

(ここは一体どこなんだろう?)

目の前には、暗闇が広がっていた。

一筋の光さえない、文字通り真っ暗な世界。

(もしかしてずっとこのままなのかな?)

絶望的な考えがよぎった瞬間、目の前に一筋の光が見えた。

その光は、徐々に接近しながら大きくなっていき、最終的に僕は光に呑まれた。

「……ん……」

目が覚めると、僕は自分の部屋のベッドで横になっていた。

窓からは綺麗な夕日が見えた。

(あれ?僕はなんで自分の部屋で寝てるんだ?まだ夕方なのに)

上体を起こそうと、右腕に力を込めた瞬間右腕に鈍い痛みが走った。

「っ!」

右腕を見てみると、指から肘までの部分に包帯が巻かれていた。

念のため体全体を確認してみたけど、右腕以外は無傷のようだ。

(僕はなんで、こんな怪我をしているんだ?)

突然、扉の開く音がしたので、考えるのをやめた。

「あらフィレス。目が覚めたのね、大丈夫?」

扉の方に視線を向けると、そこには不安そうな顔をした母、プレシア・テストアロッサがいた。

「うん。大丈夫だよ、母さん。」

「そう、よかった。」

僕の答えに安心したのか、母さんは笑みを浮かべていた。

笑みを浮かべたまま、ベッドの真横にある椅子に座った。

「ねえ、母さん。僕はなんで右腕を怪我しているの?」

僕の問いに、母さんは驚いた顔をしながらも答えてくれた。

「魔法の訓練中に失敗して魔力爆発を引き起こして、それに巻き込まれたのよ。もしかして、覚えていないの?」

ああ、そういえばそうだった。

「大丈夫だよ。今思い出したから。」

母さんに言われてから思い出した。

新しい魔法の練習中に魔力をうまくコントロールすることができなくて、魔力爆発を引き起こしてしまい、僕はそれに巻き込まれてたんだった。

「そういえば、フェイトは？」

「ああ、あの子なら外でアルフと一緒に遊んでるわ。」

「そっか。なら、僕も行ってくる。」

僕はそう言い、ベッドから起き上がるつもりだったが、母さんに止められた。

「バカな事言わないの。今の貴方がやる事は少しでも早く傷を治す事よ。おとなしく寝てなさい。」

「はい」

本当は、外でフェイトやアルフと一緒に遊びたかったけど、仕方ない。

今はしっかり休んで、早く傷を治す事に専念するか。

母さんは俺の返事を聞き、椅子から立ち上がって、扉へ向かった。

「じゃあ、母さんはやる事があるから、もう行くね。」

「うん、分かった！フェイトに、一緒に遊べなくてごめんねって伝えといてくれる？」

「……ええ。伝えておくわ。じゃあ、夕食はリニスが持ってきてくれるだろうから、しっかり休むのよ？」

「うん！」

母さんは笑顔を浮かべ、部屋から出て行った。

母さんが研究室にこもりきりになる2日前の出来事だった。

## 復活

あれから2日が経過した。

怪我が完治したのをリニスに確認してもらい、許可を得てからフェイトやアルフの所へ向かった。

フェイト達は、庭でかけっこをしていた。

庭というよりも、草原といったほうが正しいかもしれない。

母さんが緑が豊富なこの山を丸ごと購入したのだ。

だから、俺達にとってはこの山全体が庭のようなものなんだ。

「フェイト！アルフ！」

僕はフェイトとアルフがいる所まで走りながら、二人に声を掛けた。

「ファイレス！」

「お兄ちゃん！」

二人も、かけっこを中断して俺のほうに走ってきてくれた。

「もう怪我は大丈夫なの？」

「ああ。もう大丈夫だよ。今まで遊べなくてごめんな」

心配そうな顔をしてフェイトが聞いてきたので、俺はフェイトの頭を撫でながら笑顔で答えた。

「怪我が大丈夫なら、一緒に遊ぼうよ！」

アルフが目を輝かせながら言った。

「ああ、いいよ。で、何して遊ぶ？」

「じゃあ、かくれんぼしようよ！」

「分かった。じゃあ、かくれんぼやるうか。」

フェイトの提案により、かくれんぼをやる事になった。

「ジャーンケーン、ポン！」

アルフとフェイトがゲー。

俺はチヨキ。

この結果が示していることはただ一つ。

それは、俺が鬼になったという事だ。

「じゃあ、ファイルスが鬼だね。1分間数えてから私達を探してね。」

「分かったよ。けど、範囲を決めておいたほうがいいんじゃないの」

「？此処、結構広いし。」

俺の提案に、アルフはそっかと納得したように答えた。

「じゃあ、隠れる範囲は、あそこにある林まで。これでどう？」

「うん。それならいいよ。じゃあ、1分間数えるから。」

「私達は早く隠れよ、フェイト！」

「うん！」

僕が1分間数え始めると、フェイト達は急いでどこかに走っていった。

「58・・・59・・・60！」

1分間数え終わったので、とりあえず林のほうに僕は走った。

林に入ってから15分が経過。

フェイトは、林に入っただけすぐにある茂みに隠れていたの、すぐに見つけることができたけど、アルフがなかなか見つからない。

「うん・・・一周してみたけど、見つからないな。もう残るは、木に登ってるとしか、考えられないんだけど・・・」

どうやって探すかな？

サルみたいに、木から木に飛び移る事なんてできないし・・・

ん？そういえばアルフってどんな遊びをする時も、あんまりフェイトから離れた事なかったな。

ということとは、もしかして・・・

俺はフェイトを連れて、先程フェイトを見つけた茂みに移動した。

「よっと！」

僕は茂みの目の前にある木にしっかりと捕まり、上に少しずつ登った。

しばらく登ると、太い枝がある所まで辿り着いた。

なんとなく枝中央部分を見てみるとそこには、下から見られても見つからないようにするためか、体育座りの状態で座っているアルフがいた。

「アルフみつけた！」

僕が大声で言うと、アルフはギクツと体をビクつかせた。

「あちゃー。見つかったちゃった。結構自信あったのになあ。」

アルフは苦笑しながら、僕の方に向かってきた。

「アルフは何をする時も、フェイトと一緒にだからね。フェイトが隠れてた場所の近くにアルフは隠れているんじゃないかって思ったんだ。」

「当たり前じゃん。私はフェイトの使い魔なんだから。」

アルフは口を尖らせながら言った。

ここで、使い魔について説明しよう。

使い魔とは、製作者の魔力によって創られた魔法生命体の事だ。

製作者の魔力で生きる代わりに、全てを掛けて製作者を守る存在。

リニスは、母さんの使い魔だ。

最近は何にかと忙しい母さんの代わりに、ご飯を作ってくれたり、勉強や魔法について教えてくれたりしている。

僕達にとっては、師匠であり、姉のような存在だ。

アルフも将来はリニスみたいになるのかな？

まあ、今はどちらかというフェイトや僕の遊び相手、あるいは勉強仲間みたいになっているけど。

「さ、一緒に下に下りようよアルフ。」

そんな事を考えながら、僕はアルフに手を差し伸べた。

僕が差し出した手をアルフが握ったのを確認して、足に魔力を集中させて飛び降りた。

スフィアとかは生成できないけど、身体強化などの簡単なものなら僕にもできる。

スフィアの生成に関しては、フェイトの方がはるかに上だ。

兄としては情けない限りだが、リニスによると、僕が保有している魔力量はS+。

母さんが昔所属していた時空管理局（他にも存在している世界の間で干渉し合う出来事を管理している機関）の中でも、全体の5%くらいしか居ないらしい。

自分がそれだけの魔力量を保有しているっていうのが正直信じられないんだけどね。

スフィアすらうまく生成できない現状をリニスに話し、助言を求めた。

そうしたら、次のような答えが返ってきた。

『フィレスのスフィア生成の訓練をみている限り、生成方法に問題はありません。ですが、1発に込める魔力の量が多すぎるように感じます。もう少し、込める魔力の量を減らしてみればどうでしょう』

その後僕はリニスに言われたように、スフィア1発分に込める魔力の量を減らしてみただけど・・・

結局ダメだった。

今までと同じように魔力爆発を起こしてしまった。

でも、2日前のやつよりはだいぶ威力が小さかった。

今度は、もう少しスフィアに込める魔力量を減らしてみようと思う。さて、無事に着地できた僕とアルフは、フェイトと一緒に家に戻った。

玄関の扉を開けようと手を伸ばした時、扉が内側に開いた。

扉の先には、リニスがいた。

「あら、お帰りなさい。今ちょうど迎えに行こうと思っていたんです。」

「ただいま、リニス」

「「ただいま〜!」」

僕に続き、アルフとフェイトも元気よく言った。

「とりあえず、手を洗ってきてください。その後、渡したいモノがあるので全員、メディカルルームに来てください。」

「「「はい!」」」

「ねえリニス。渡したいモノってなに?」

「それは、メディカルルームに着いてからのお楽しみです。」

リニスはにこやかにそう言い、近くにある曲がり角を曲がった。

僕達はリニスの言った事がよく分からなかったけど、とりあえず手を洗うために洗面所に向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6383m/>

---

魔法少女リリカルなのは～始まりの物語～

2010年10月11日15時13分発行